

第10回年次大会を振り返って

北海道池田町

町長 大石和也

すでに年が明けたので、一昨年(1993年)になるが、山梨大学の横塚弘毅先生から、第10回のブドウ・ワイン学アメリカ学会日本部会の開催を池田町で受けてもらえないかと依頼された。今までは東京と甲府で交互に年次大会を開催しており、第10回でもあるので、区切りとして地方開催を希望されたようである。早速、北海道産ワイン懇談会にも計り、道産ワイナリーの協力を得て、池田町での開催を決定したのであった。会場の都合、宿泊など心配もあったが、町の大きな行事として取り上げ、町の関係機関、団体にも協力ももらい、7月31日(日)～8月3日(水)までの日程を決定した。

実行委員会をつくり、対応には田舎ではあるが、可能な限り皆様に喜んでいただける配慮をし、北海道の各ワイナリーの会員の方々にもお手伝いを願ったところである。

7月のASEV JAPANが近づきにつれて慌ただしくなってきた。それというのも、日程的に町の一大行事である「第7回池田町音楽キャンプ」が8月1日～8月9日と、8月初旬に重複しているからである。一方でブドウとワインの研究発表を聞きながら、一方ではクラシック音楽を聴かなければならないという、私にとっては誠にぜいたくな日程となった。

7月31日は日曜日であったが、全国各地からそれぞれのコースで池田町へ入られたが、当会の秋山会長他、ASEV 会長 Bradley Alderson ご夫妻も参加して、町主催の歓迎レセプションを開かせていただいた。久々にブドウ、ワインについてのお話を、楽しく聞かせていただいた。

8月1日には9時から池田町田園ホールで、一般講演、シンポジウム、招待講演などがあり、接すること久々の、ブドウの栽培に関する研究、ワインの醸造、製造に関する研究など、目白押しにあったが、残念ながら全てを聞くことは出来なかった。ASEV JAPAN の発足当時から理事として選ばれていたにもかかわらず、年次大会に触れたのはこの時が最初である。

私にとってASEVのあり方、とくに興味が深かったのは、本来ブドウとワインは表裏一体であるにもかかわらず、日本では何故かブドウ栽培とワイン醸造の分野が、分離して研究されているように思えて仕方なかった。

しかし、今回の年次大会の内容を見て、ASEV JAPAN が目指している先を、見せつけられた思いがした。私の見解が間違っていなければ、日本においては醸造技術の発展は

すばらしく進み、それに比べてブドウ栽培、特にその地方に合った育種技術は、遅々として進んでいないように見受けられる。ブドウ栽培からワインまでを、一線上で原料から加工、そして製品へと結びつけようとする考え方には大賛成である。

国内におけるワインの価格破壊は、安値ワインの風潮をたどっている。10年前のジエチレングリコール事件の折、表示のあり方が論議となり、北海道からの提言として、濃縮果汁の表示を求めたが果たせなかった。しかし、最近では安値ワインにこの表示がされる様にもなってきた。

こんな時代だからこそ、原料から製品であるワインまでの一貫研究は益々必要である。